

昭和初期の青年読書調査

——東京のエリート学生を中心に——

The Print Media and Elite Students in the Early Showa of Tokyo
——An Analysis of Five Surveys Conducted from 1933 to 1935——

張 賽 帥

はじめに

書物の歴史、あるいは「ものを書き記す」という歴史は、人類が自分たちの様々な感想や経験、あるいは見聞した出来事を、他人に伝え、記録にとっておこうと考えた時から始まる¹⁾。今日のような識字率がほぼ100パーセントで、大量の印刷物が流通し、誰でも本を読めるという近代の読書空間は、長い時間にわたって様々なメディア技術の進化や社会変化が積み重ねられた成果でもある。今日の読書する国民の源は、1445年ごろにグーテンベルクが発明した活版印刷術にまで遡ることができるだろう。グーテンベルクが人類文化史上に果たした功績は計り知れないが、すべての文化は印刷術が発展し、流通した印刷物を通して伝えられ、普及したと言っても過言ではない²⁾。印刷術の普及により、書物が安く入手できるようになり、多くの人々が書物を手にすることができ、文字に親しむことで、様々な知識を入手できるようになった。日本に洋式印刷術が本格的に伝来したのは、明治に入って、本木昌造が邦文鉛活字を作り、企業化に成功した時期であった³⁾。文字の発明は紀元前三、四千年の頃からだと言われている⁴⁾が、長い間書物は一部エリートや上層階級に属するものであった。明治期において活版印刷が普及し、大正・昭和初期から様々な活字メディアが大衆化することにより、日本では大衆読者が登場した⁵⁾。

当時の東京における都市化の進展は、交通網などのインフラの整備、人口の増加、教育の普及をもたらした。このような都市化は活字メディアにも大きな変化をもたらした。人々の娯楽欲求を満たすための様々な読書装置も備えられ、大衆総合雑誌の登場と円本ブームにより、活字メディアの大衆化が実現することで、昭和初期の東京において読書空間が出現した。

この読書空間において、当時の青年⁶⁾たちは一体どのような読書活動を行っていたのだろうか。本稿では、昭和初期に実施された学生を対象とした5つの調査結果を分析の対象とし、当時の青年たちの読書活動の実態を検証する。昭和初期までに、義務教育の浸透によって、日本はそれまで以上に学歴を尊重する社会となり、中高等教育機関への進学競争が激化

した。特に1935年小学校から大学に至るまで、様々なレベルにおいて学校教育を受ける選択肢が整備され、そのトータルな就学者はおおよそ1400万人を数えていた。なかでも、高等教育の就学者数は約18万と言われ、総就学者の1.3パーセントにあたり、大学受験を勝ち抜くのは容易ではなかった⁷⁾。そのような時代において受験戦争を勝ち抜いた都市のエリート学生が、どのような読書活動をしていたのか、エリート学生たちの読書活動の実態を検証することで、彼らの日常生活において、読書がどのような位置付けにあり、それはどのような歴史的・文化的文脈のうえで成立していたのかという視点から考察することを、本研究は意図している。

昭和初期において多くの読書調査が実施されている。本稿では、主な5つの調査を比較しながら、当時の青年たちの読書実態を考察する。まずは1934（昭和9）年に実施された〈帝国大生調査〉、1934（昭和9）年の〈東京商大予科生調査〉と1935（昭和10）年に実施された〈慶應義塾生調査〉の3つがあり、それらは、エリート学校の学生を対象として実施された調査である。1934（昭和9）年の〈日本図書館協会調査〉は、東京市内の6つの公共図書館の入館者を対象にした調査である。本研究では、日本図書館協会調査全体から、青年学生のデータを取り出して分析を試みた。1933（昭和8）年の〈現代学生思想調査〉は、『文藝春秋』による調査の結果が、この雑誌に紹介されたもので、これは学生の思想調査が中心となっている中に、調査対象者の読書傾向が含まれているものである。

本論の構成は、まずは、このような読書空間を創出した1930年代初頭の東京の社会的背景に触れる。近代化を遂げた東京においては、読書装置もすでに整備されていただけでなく、高等教育機関の増設によりエリート学生が集中していた。これは普段彼らの読書する姿を、都市のあらゆる場面で見ることができたことを意味し、本研究ではこの視点から、残された当時の読書調査を検討する。そして、調査対象者の新聞購読の実状についての質問も含まれている〈帝国大生調査〉、〈東京商大予科生調査〉、〈慶應義塾生調査〉をそれぞれ比較し、当時のエリート学生たちの新聞購読傾向の分析も行った。さらに、学生の雑誌購読実態を考察し、いかなる雑誌が、どのように読まれていたのかについての分析も試みた。また、それぞれの愛読書のジャンルを比較分析し、その読書傾向を分析した。なかでも〈東京商大予科調査〉のデータに関しては、学年別の学生の読書傾向の詳しい分析と、愛読された書籍のジャンルと学年別の関係性の検討も試みた。

第1章 1930年代初頭の東京

まずは、1930年代初頭の東京の社会的背景に触れたい。日本では、明治時代の後期から第一次世界大戦以降にかけて、急速に産業化が進み、それは社会全体に大きな変化をもたらした。また、1923（大正12）年に関東大震災が発生し、東京では新たな都市が復興とともに

に形成され、さらに都市化が加速した。以下では、1930年代の東京における近代都市の出現をもたらした様ざまな要因を挙げてみよう。

近代都市を作ったその一つは、東京の交通網の発展である。1912年に京成電気軌道、1913年に京王電気軌道が開業し、第一次大戦後に本格的な私鉄ブームとなる⁸⁾。さらに、震災後には新たな建設が進み、鉄道網が拡大し、今日と大差ないほどにまで東京の交通網は整備されたのである⁹⁾。次に注目できるのが、近代化以降大幅に増加した東京の人口である。「明治維新から、およそ50年間、10年毎に約30万人ずつ膨張し続けてきた」¹⁰⁾というほど人々が東京へ流入した。一方、東京は1932(昭和7)年に、郊外の郡部、町村を合併し、新しい東京市になり¹¹⁾、人口もその規模の拡大に伴ってさらに増加することになった。教育のありかたから見てもこの時期は大きく変わっている。大正から昭和にかけて、日本では中等教育機関が大幅に増設され、日本の経済発展に貢献できる人材養成に力が注がれた。

さらに、都市化を示すものとして、住宅の変化やオフィス街の出現もあげることができるだろう。その結果、人々のライフ・スタイルも大きく変わったのである。中でも、この昭和初期において、人々のライフ・スタイルに最も影響を与えたのは西洋文化である。それを最もシンボリックに示すのが東京の街頭に現れた洋装のモダンガール、モダンボーイであった¹²⁾。このように都市への人口流入、鉄道などのインフラの整備、教育機関の増設、住空間の近代化、西欧文化の流入などが一気に加速し、1930年代の東京の都市のランドスケープは一変し、近代都市へと大きく変わったのである。それと同時に、西洋の音楽、映画、料理なども人々の日常生活に浸透し、英語を教える学校も出現しその数を伸ばした。

読書装置の整備

このように東京が近代都市へと発展することにより、映画、音楽、書籍、雑誌などへの娯楽欲求の高まりがさらに顕著となった。日本ではこの時代において、すでに読書は娯楽の手段として、知識層から労働者階級まで幅広く享受されており、それを下支えする読書装置¹³⁾も整備されていた。書店、図書館、古書店¹⁴⁾などの読者に読み物を提供するシステムである読書装置は、人々の読書生活の基盤的な存在として読書空間を形成している点については先行研究でも検証されている¹⁵⁾。ここでは、当時の読書装置の中でも、最も一般的であり、学生たちの読書活動に最も関係の深かった書店、図書館、古書店について詳述してみよう。

まず、書店数に関してみると、1923(大正12)年の東京の書店数は、震災前は約1500店程度であったという。大震災以降はさらにこの数は増え続け、1929(昭和4)年には、東京の書店は震災前からほぼ倍増したと言われている¹⁶⁾。

また、図書館は明治末から大正前期を通じて、都市では急速に整備が進んでいった読書装置の1つである。日本における公共図書館の数は、1897(明治30)年の30館から、1907

(明治 40) 年の 150 館へと 5 倍に増加した。さらに、1916 (大正 5) 年になると、1000 館を突破し、1921 (大正 10) 年に 2000 館、1926 (大正 15) 年に 4000 館と飛躍的に伸び続けて行ったことが、残されている資料で明らかになっている¹⁷⁾。

次に古書店も特筆に値する。永嶺 (2001) は、戦前の読書生活において、古書店という読書装置が大きな役割を果たした点を指摘している。1930 (昭和 5) 年の東京において、店舗を持つ通常の古書店は 676 店であったと言われている。しかしながら、不定期に出店するためその把握が容易ではない夜店・露店も数多く存在していたこともわかっている。大正期を通じ、東京市内での露店の古書商人は 8000 から 9000 人程度に達していたということである。この数を見ても、昭和初期において、夜店・露店という読書装置は人々の読書活動に浸透していたことがわかる¹⁸⁾。

そのほかにも、本を購入するより安価な料金を貸し出すことができた貸本屋¹⁹⁾、より安い価格で雑誌を読者に供給する雑誌レンタル業の雑誌回覧会²⁰⁾、読書のためという表向きの看板は形骸化し、主たる目的は風俗営業や軽飲食を提供する施設となっていた新聞雑誌小説類縦覧所²¹⁾ など、多種多様な商業的な読書装置も数多く存在していた。

以上、書店、図書館、古書店、夜店・露店といった 1930 年代の日本における主な読書装置を紹介した。東京において、読書という行為はここにあげたような読書装置の基盤の上に実践されており、読書好きの国民を創出していたことがわかる。

活字メディアの大衆化

永嶺 (2004) によれば、「読書国民」の様相は、すでに明治 30 年代に確認することができるという。この日本における「読書国民」の形成については、2つの要件が大きく寄与している。その 1 つ目は、出版物の均質的な流通システムの確立である。活版印刷の発展と交通網の整備によって、明治 20-30 年代を通じて出版物流通システムが確立され、出版物が均質的に全国に流通し始めた。2 つ目は、読書習慣の普及である。現代文と句読点の普及、さらに学校教育における読み書き能力習得の重視によって、国民のリテラシーが向上し、その結果として読書習慣が日本人の間に遍く普及した²²⁾。

しかしながら、明治 30 年代に登場した「読書国民」は、中産階級知識人と都市部を中心とした一部の国民に限定されていた。本格的な読書国民の登場は大正・昭和まで待たなければならなかったと、永嶺 (2004) は指摘している。前述したように、中高等教育機関は大正から大幅に増設され、国民のリテラシーが向上し、活字メディアを楽しめる国民が増加した。また、大正末から昭和初期にかけて、活字メディアの大衆化によって、活字メディアは幅広くその読者層のすそ野を広げ、大衆読者が登場した。

次に、このような活字メディアの大衆化に貢献した代表的なものとしてまずあげることができるのは大衆雑誌であろう。その代表的なものは『文藝春秋』と『キング』である。『文

図表 1 新聞に掲載された『現代日本文学全集』の広告

出典：『東京日日新聞』大正15年11月24日朝刊

『藝春秋』は1923（大正12）年に創刊されたものであり、中等学校卒業以上の知識人層を対象としていた。一方、『キング』は1925（大正14）年に講談社から創刊された雑誌であり、小学校卒業レベルの読者を想定した雑誌であった。しかし、永嶺（2001）によると、両雑誌とも「きわめて強く読者を意識し、大量生産・大量販売を最大の目的とする販売戦略」に基づいて出版されていたもの²³⁾であった。

また、雑誌より後にはなるが、他のジャンルの出版物による書籍の大衆化も進められた。その代表的なものが、商品開発によってもたらされた円本と文庫本である。円本とは、文学全集本を一冊一円で配本したものである。円本を最初に始めたのは改造社で、1926（大正15）年に、『現代日本文学全集』の予約配本を始めたものが、その嚆矢とされている。図表1は当時、毎日新聞に掲載された円本の広告である。その後、新潮社、平凡社、春陽堂などの出版社が様々な全集を刊行し、円本ブームが到来した。

しかしながら、円本の欠点は、予約制によって購読が制約され、購読者が好みに応じて自由に書物を選択できないという点であった。それに対して、1927（昭和2）年に岩波書店が、古今東西の名著を廉価に提供するシリーズとして「自由分売」の岩波文庫を発売し始めた²⁴⁾。これによって、読者たちが自由に古典文学を選択できるようになった。

このような、大正末期から昭和の初期にかけての『文藝春秋』と『キング』という大衆総合雑誌の登場に続き、円本や文庫本という読者にとってより入手しやすい供給者側からの販売戦略は、活字メディア大衆化の実現と大量の読者の開拓に貢献した。

また、読み手であるリテラシーの備った層の拡大も、読書空間の出現に貢献した。大正から昭和にかけての中高等学校の増加は、読書を娯楽として楽しむことが可能である新中間層の急激な拡大に貢献した。この時期において中高等学校の学生たちは中間層予備軍でもあった。このような実態を調査したものが残されており、昭和初期における学生の読書活動は学校、出版社、図書館側などで実施されていたものから当時の実状を推測することができる。次章では、当時の学校制度と学歴社会について説明をし、東京の教育実態を述べる。

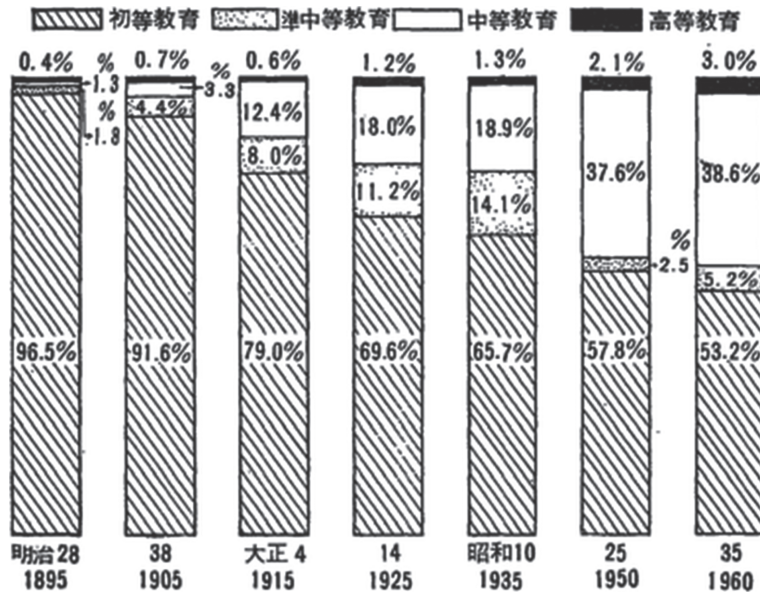
第2章 学歴主義とエリート学生

日本は学歴社会であることは言及するまでもないが、この日本型学歴主義をもたらしたものは教育に対する社会側の要求の「引上げ効果」と教育を受ける個人側の要求の「押上げ効果」という二面性を意図した動きであった。この二面性は明確に照応し、「時代や国によって、前者がはげしい形であられ、後者に大きく先行する場合や、逆に後者がしだいにつよくなってゆき、前者を大きく追いつく場合もある²⁵⁾」ように不可分な関係にある。日本の学歴社会の出発点は明治維新までに遡ることが可能であり、この時代において、「引上げ効果」を意図した社会政策としての教育制度の整備と普及への働きかけが行われることで、ここから国民の読み書き能力の普及が促進されたのである：

明治維新以降、国家の急速な近代化を必要とした日本においては、新知識や高等教育を身につけた人材が強く求められ、国家有用の人材の選択・育成が、まず日本における大きな眼目となった。この傾向は、程度の差はあれ、こんにちでも基本的には維持されていた。国家の指導的人物から産業企業に有用な人物にいたるまで、人材を選別する機能がとくに重視されている²⁶⁾。

明治政府側は近代国家を建設するため、欧米列強をモデルとする「富国強兵」、「文明開化」の政策を導入し、国民一般の教育を重視した。1872（明治5）年公布の「学制」より、日本の近代教育は開始された²⁷⁾。その後も、様々な学制法令が公布され、学校制度の整備が着実に行われた。1900（明治33）年の小学校令の全面改正により、義務教育制度が完全実施され、これに伴い就学率は急上昇し、1909（明治42）年には98パーセントに達し、「国民皆学」実現の悲願は一応達成された²⁸⁾。この時点において、日本全国の知性ある若者たちの多くは猛烈な読書癖を持ち²⁹⁾、彼たちはすでに書物の主たる消費者となっていた。

図表2 教育段階別在学者数の比率 (10年ごと)



出典：「日本の成長と教育」文部科学省，昭和37年度

しかしながら，この時代の書物は，あくまで一部の限られた社会階層の人々に属するものであった。

一方，この時代の中高等教育機関の整備はまだ充分ではなかった。義務教育の普及により，尋常小学校を終了してから，男子が進学する中学校と女子が進む高等女学校中学校，すなわち中等学校への進学希望者が急増し³⁰⁾，それに伴い進学競争が激化した。そのため，中高等教育の整備は急務であった。しかし，初等教育に対して，中高等教育の量的に拡大した時期は大正末まで待たなければならなかった。準中等教育と中等教育の在学者の比率をみると，1915（大正4）年の20.4パーセントから1935（昭和10）年の30.1パーセントになり（図表2），増加する傾向にある。それらの中等教育機関からの卒業者が増え，多くの人々は都市の中堅の学校を目指すようになり，進学率が増加することになった³¹⁾。

日本の高等教育機関数は，1915（大正4）年の108カ所から1935（昭和10）年の308カ所へと飛躍的に拡大した³²⁾。高等教育機関の拡充の背景には，第一次大戦の影響で，会社や銀行などの設立が相次ぎ，進学希望者が激増したことも挙げられる。高等教育の在学者の比率も0.6パーセントから1.3パーセントの倍以上に増加したが，在学者全体の中では非常に低い比率を占めており，ここから高等教育機関への入試が過熱化していることがわかる。このような中高等教育機関の増設により，小学校から大学にいたる学校制度が1つの体系として明確に構造付けられるようになり，一般庶民の進学意欲も高まった。その結果，初等教育から中等教育へ，中等教育から高等教育への進学に際しての入学試験競争が激化した³³⁾。

この現象は、本章のはじめたところに述べた学歴主義のもう1つの特性、教育を受ける個人側の要求の「押上げ効果」と言えるだろう。

当時の学生たちは都市に集中する傾向にあった。それは、明治以降、日本の青年たちが「階層的」と「地理的」な移動を目指すには、上京して中高等教育をうけることにより「勉強立身」という夢を実現することが最も有効な手段であり、多くのものがそれを望んでいたからである³⁴⁾。大正・昭和時代以降の大学・高等学校・専門学校などの多くは大都市又は中都市に設けられており、エリート学生たちはそれらの都市に集中することになった。精神的文化財の産出者や商品の生産者やとの対照において、都市にいる学生たちはその享受・需要者もしくは消費者の地位を占めるものであった。書籍・雑誌などの各種の出版物の読者だけには留まらず、劇・映画・音楽会・講演会等々の観客又は聴衆として学生の果たす役割はかなり大なる重要性を持っていた³⁵⁾。昭和4年度における私立大学の学生を含めた全国の大学生6万7千余人のうち、4万3千人以上が東京に集中していたという³⁶⁾。つまり、昭和初期において、多くのエリート学生であった青年たちは東京に集中し、学校に通いながら、活字メディアを映画、音楽と同様に、娯楽の一手段として消費していたのである。彼たちは初中等教育機関を卒業して職に就く人々よりも、より高い読み書き能力があり、活字メディアをより享受することが可能な読者層であったと考えられる。

ここで検討する当時のエリート学生に対して、活字メディアは娯楽の役割のほか、どんな意味を持っているのかについて確認しておこう。まず、当時多くの学者や教授たちは学生たちに、古典的な教養書を勧めている。河合(1937)は読書することを、人間としての一般的教養を供する最も廉価にして軽便なる手段であり、少数の古典的な書物は万人の必読書であると主張している。特に学生時代においては、先ず東西の古典を読むことを勧めている³⁷⁾。室伏(1936)の『青年の書』の中にも、青年たちに読書することを勧め、特に古典的な書籍を読む説が見られてくる³⁸⁾。また、古典的教養と並び、現代的教養も重要であり、現代社会に生活している学生たちは、新聞・雑誌のような現代教養知識を得る重要性を主張する学者もいる³⁹⁾。つまり、当時の学生に対して、活字メディアは古典教養知識、または現代教養知識を学習できる重要なツールとしてとらえられていたと考えられる。

すなわち、大正・昭和時代に入り、読書空間が出現していた東京に集中し、読書活動をしていた学生たちにとって、活字メディアは古典的・現代的教養知識を得る重要な手段として奨励されていたのである。またそれはだけでなく、読書は一つの娯楽手段としても享受されていた。

次章では、青年学生という研究対象はどんな特徴を持っているのかについて検討し、5つの調査について紹介していく。

第3章 東京の青年学生読書調査

青年学生の実態

青年 (Youth) と青年期を典型的に創り出したのは 18 世紀において近代化を遂げた西欧社会である⁴⁰⁾。若者あるいは青年という言葉は、世界大百科事典では「もはや子どもではなく、しかもいまだ大人ではない人間の存在形態を広く指す」と定義されている。若者・青年たちは、年齢の幅は何歳から何歳までかという点からみたときの定義については、日本国語大辞典によると、「一四、五歳から二十代くらいの時期の人をいう」となっている。そして、浜島 (1975) は、若者ないし青年は、社会心理学では、精神的にも肉体的にも、子供から大人への渡る段階にあるマージナル・マンとして特色付けられ、10 代の後半から 20 代の前半にいたる年齢層がその時期を迎えると定義している。

一方、浜島 (1975) の青年観は、若者たちはいつもの時代にもいたし、歴史的・社会的状況の変化に対して敏感に反応し、「時代のさきがけ」⁴¹⁾ 的な存在であるものの、若者層そのものの内部は、性別、年齢、学歴、職業、地域、階層などの違いに応じ、実際は多様に分化している⁴²⁾ とされている。

それでは、昭和初期の日本における高等教育を受けている学生はどのくらいいたのだろうか。1935 年の時点で、小学校から大学に至るまでの様々な学校を通じ、およそ 1400 万人の就学者がいたとされているが、その中で、大学・高等学校・専門学校に在学しているエリート学生は 18 万人であった。このエリート学生人数と就学者の総数と比較すれば、僅少の数であるとはいえるものの、それだけを取り上げて見ると、かなり大量の数になる⁴³⁾。当時のエリート学生たちの多くは大都市又は中都市に集中し、活字メディア大衆化時代のさきがけとなり、学生読者層を形作っていたことになる。

5 つの調査について

昭和初期において多くの読書調査が実施されている。本稿では、主な 5 つの調査結果の中の読書に関連するものを比較しながら、当時の青年たちの読書実態を考察する。それらの調査を 1 つにまとめたのが図表 3 である。ここで〈帝国大生調査〉、〈東京商大予科生調査〉と〈慶應義塾生調査〉としているのは、エリート学校で実施された学生調査からのものである。〈日本図書館協会調査〉は、東京市内の 6 つ公共図書館の入館者に関する調査である。ここでは、青年学生のデータを取り出してみる。〈現代学生思想調査〉は、『文藝春秋』に掲載された学生の思想調査から読書行動に関するものを選び出したものである。

〈帝国大生調査〉は、1934 (昭和 9) 年に実施された東京帝国大学による「学生生活調査」の中の読書に関する質問項目を取り出したものである。これは、1934 年 11 月 12 日から 17

図表 3 昭和初期の青年を対象とした主な読書調査

調査のタイトル（回答数）	実施年月	調査を行った機関
帝国大生調査（5402 名）	1934（昭和 9）年 11 月	学校 （エリート学校）
東京商大予科生調査（575 名）	1934（昭和 9）年 10 月	
慶應義塾生調査（1022 名）	1935（昭和 10）年 10 月	
日本図書館協会調査（3078 名）	1934（昭和 9）年 1 月	図書館
現代学生思想調査（10 名）	1933（昭和 8）年 1 月頃	出版社

出典：「学生生活調査」（東京帝国大学学生課，1934 年）
「東京商科予科『学生生活調査報告』」「思想調査資料第 26 輯」（文部省思想局，1935 年）
「学生生活の思想的方面の一調査：学生生活調査第二報告」（慶應義塾理財学会，1935 年）
『図書館における読書傾向調査』（日本図書館協会，1934 年）
「現代思想調査（第二回）—学生はどう考へるか？」『文藝春秋』，1933 年 1 月号

日まで、東京帝国大学（現東京大学）によって 7464 名の在籍学生を対象として実施されたものである。調査に回答した学生数は 5402 名に達しており、回答率は 72.37 パーセントであった。このような 7 割以上の回答率からみると、この調査の示す当時の東京帝国大学の学生生活の実情の把握には妥当なデータであると言えるだろう。

〈東京商大予科生調査〉は、東京商大予科が 1934（昭和 9）年 10 月に実施した「学生生活調査報告」によるものである。調査対象は当時の学生数 640 名で回答したのは 575 名、これも解答率が約 9 割に及んでおり、こちらも高い回収率となっている。

〈慶應義塾生調査〉のタイトルは、「学生生活の思想的方面の一調査：学生生活調査第二報告」となっており、1935（昭和 10）年の慶應義塾大学による学生調査の結果をまとめたものである。この調査は経、法、文の三学部の本科及び高等部の学生 1022 名を対象としている。

〈日本図書館協会調査〉は 1934（昭和 9）年 1 月 24 日に、日本図書館協会によって行われたもので、東京市内の 6 つの図書館における入館者の読書傾向に関する調査である。入館者 5190 人に対して調査票を配布し、回答者は 3078 人であり、解答率はほぼ 6 割に達している。

〈現代学生思想調査〉は、文藝春秋が実施した学生に対する「現代思想調査」である。配布された 100 通のアンケート用紙の中、71 通の回答を得た。回答者の平均年齢は 20.44 歳となっている。本論で用いた調査結果は、『文藝春秋』1933（昭和 8）年 1 月号に載せられた 10 名の学生調査である。

第 4 章では、この 5 つの調査結果を用いて、比較分析を行う。

第4章 活字メディア

新聞

調査対象者たちの新聞利用の状況を検証する前に、まずは当時の新聞と読者の実態について見てみよう。1934（昭和9）年の日本において、新聞の発行部数は1080万部に達しており、1部あたり人口数は6.16人であった⁴⁴⁾。また、山本（1981）によると、当時の東京における新聞については、『東京日々』、『東京朝日』がシェアを伸ばし、『報知』、『時事』と『国民』が衰退し、代わって『読売』が台頭し始めたとされている⁴⁵⁾。また、当時の新聞読者について推測できるのが以下の山本（1981）の記述である：

各階層の新聞読者層の比率が大正中期から昭和初期の期間において、不況にもかかわらず、（新聞の読者は：筆者加筆）年々上昇していたことと推測される。もちろん不況のとき、とくに昭和恐慌期で失業者が急増したとき、その上昇率は鈍化しただろうが、新聞読者が減少したことはなかったはずである。⁴⁶⁾

ここでは当時の東京における新聞の状況について、各階層の読者は不況の影響を受けていたが、新聞を購読していたかどうかには別としても、新聞との接触は減少していなかっただろうと山本（1981）は推測している。

さらに、新聞読者については、「学歴と読者比率の相関は高い。学歴の高い知識人や商工階層の読者比率が労働者や農民読者のそれよりも高くなる」⁴⁷⁾とされている。つまり、学歴の高い人々はより新聞を読む傾向にある。一方、中学以上の学生は学歴の高い知識人であったものの、固定読者は少なかった⁴⁸⁾と山本が述べているように、当時の新聞は学歴や社会階層と深く関係のあるメディアであったことがわかる。これらのことを踏まえ、以下では新聞を読む行為の実態を調査結果から見てゆこう。

5つの調査の中で、新聞購読の実状に触れたのは〈帝国大生調査〉、〈東京商大予科生調査〉、〈慶應義塾生調査〉である。この3つに共通しているのは、当時は今以上にエリート校でもあった高等教育機関の学生を対象とした調査であることで、その結果は図表4に示した。残念なことに、〈帝国大生調査〉では、新聞購読ランキングではなく、50音順で上位6位の人気購読紙の名前を並べているに過ぎない。また、〈帝国大生調査〉の調査結果には、〈東京商大予科生調査〉、〈慶應義塾生調査〉と異なり、帝国大学新聞もそのランキング・リストの中に含まれている。当時帝大生は学校の新聞も読み、学校構内の出来事にも関心があったことが伺えるだろう。

また、〈帝国大生調査〉の中にリストアップされている一般紙ではない『帝国大学新聞』

図表 4 1930 年代のエリート学生に最も読まれていた新聞

調査タイトル	帝国大生調査 50 音順	東京商大予科生調査	慶應義塾生調査
よく購読していた新聞 (学生人数)	時事新報	朝日 (350)	東京朝日 (610)
	帝国大学新聞	日日 (214)	東京日々 (352)
	東京朝日新聞	読売 (168)	読売 (295)
	東京日日新聞	報知 (40)	東京時事 (247)
	報知新聞	時事 (36)	報知 (76)
	読売新聞		

出典：「学生生活調査」（東京帝国大学学生課，1934 年）

「東京商科予科『学生生活調査報告』」「思想調査資料第 26 輯」（文部省思想局，1935 年）

「学生生活の思想的方面の一調査：学生生活調査第二報告」（慶應義塾理財学会，1935 年）

を除いて比較すると、この 3 大学において、学生たちによく購読されていた新聞は、『東京朝日新聞』、『東京日々新聞』、『読売新聞』、『報知新聞』と『時事新報』であったことがわかる。また、東京商大予科生と慶應義塾生の間では、『東京朝日新聞』、『東京日々新聞』、『読売新聞』の順によく読まれていたことがわかり、購読新聞に関しては学校による大きな差はないことがわかる。

一方、新聞の購読状況について、永嶺（1997）が調べたものによると、当時の人々は勤務先などでの接触を除けば、通常世帯単位での購読が中心となっており、各個人単位で購読するケースは少なかったという。従って、高等教育機関の学生に対して調査を実施した新聞購読実態は、彼らの家庭における購読新聞という意味だと考えることができる。また、山本（1981）は、大正・昭和戦前期、『東京朝日』の読者層は比較的知識人読者が多かったとしている。すなわち、これらの調査から得られた購読新聞状況をみると、高等教育機関の学生たちの新聞購読の傾向は都市中産層家庭の示した傾向と近いことがわかる。またこれは、ここから高等教育機関の学生たちの出身階層を類推することも不可能ではないことを示している。

雑誌

当時の学生たちの間では、明確に教科書の雑誌と娯楽雑誌の機能分化が確立しており、学生にとっての教科書の雑誌が『改造』、『中央公論』であり、『文藝春秋』、『キング』は徹底して娯楽雑誌として受容されていた⁴⁹⁾。しかし、学校のレベルによって、学生の読む雑誌の種類も大きく異なっていた。まず、高等学校生や大学生などのエリート学生の間では、『改造』、『中央公論』を中心とする総合雑誌が主に読まれていた。また、『キング』のような大衆総合雑誌は「講談社式の低級俗悪な出版物」とみなされ、一般に学生知識人読者はそれに対して徹底した冷笑的スタンスを取っていたようである⁵⁰⁾。つまり、学生にとって、『キ

図表 5 1930 年代のエリート学生によく読まれていた雑誌

調査タイトル	帝国大生調査 (50 音順)	東京商大予科生 調査	慶應義塾生 調査	日本図書館協会 調査	現代学生思想 調査
調査対象者数	5402	575	1022	1219	10
購 読 雑 誌 (人)	エコノミスト	中央公論 84	改造 226	キング 184	文藝春秋 4
	改造	キング 80	中央公論 207	中央公論 167	改造 3
	キング	改造 71	文藝春秋 132	改造 132	中央公論 3
	科学知識	経済往来 62	キング 112	文藝春秋 79	経済往来 1
	経済往来	文藝春秋 58	経済往来 107	科学画報 68	新潮 1
	思想				科学 1
	中央公論				講談社系 1
	文藝				
	文藝春秋 法学協会雑誌				

出典：「学生生活調査」（東京帝国大学学生課，1934 年）

「東京商科予科『学生生活調査報告』」「思想調査資料第 26 輯」（文部省思想局，1935 年）

「学生生活の思想的方面の一調査：学生生活調査第二報告」（慶應義塾理財学会，1935 年）

『図書館における読書傾向調査』（日本図書館協会，1934 年）

「現代思想調査（第二回）—学生はどう考へるか？」『文藝春秋』，1933 年 1 月号

ング』は一時的な気晴らしの娯楽雑誌でしかなかったとされている⁵¹⁾。

それでは、昭和初期における、高等教育機関の学生たちはどのような雑誌を購読していたのだろう。この 5 つの調査に基づき（図表 5）、当時のエリート学生の雑誌購読実態を考察してみよう。

5 つの調査の結果によると、学生たちにとって雑誌購読はごく一般的なことであり、購読された雑誌の分野も幅広く、その購読誌の種類は 200 種にも達していたことがわかる。図表 5 では〈東京商大予科生調査〉、〈慶應義塾生調査〉、〈日本図書館協会調査〉における購読された雑誌の上位 5 位までを取り出して比較したものである。〈現代学生思想調査〉は調査対象者数が少ないため、全ての調査結果をここでは用いている。帝大生に対する雑誌購読実態〈帝国大生調査〉は、購読者数の多い雑誌 10 種を選んで、50 音順に並べたものである。〈東京商大予科生調査〉、〈慶應義塾生調査〉、〈日本図書館協会調査〉、〈現代学生思想調査〉の結果から購読傾向を見ると『改造』、『中央公論』がそれぞれトップ 3 に入っていることから、よく読まれている雑誌には学校による大きな違いがないことがわかる。また、『文藝春秋』と『キング』は 2 回ずつトップ 3 に入っている。このような各雑誌購読調査から共通する部分を考察すると、当時の高等教育機関の多くの学生は『改造』、『中央公論』、『文藝春秋』という総合雑誌をよく購読していたことがわかる。また、『キング』という大衆雑誌もかなり愛読された人気雑誌であったことがわかる。

図表6 ジャンル別に見た1930年代のエリート学生の愛読書

調査タイトル 順位	帝国大生 調査	東京商大予 科生調査	慶應義塾生 調査	日本図書館協会 調査	現代学生思想 調査
1位	文藝	小説	文学	文学	文学
2位	経済	文学	経済・社会 法律	理学・工学・医学	哲学・経済 法律・思想
3位	法律	経済	宗教	政治・法律経済 社会・教育・軍事	自然科学・哲学 小説・文藝
4位	自然科学	随筆	自然科学	学習書	—
5位	哲学	歴史	—	哲学・心理倫理・ 宗教	—

出典：「学生生活調査」（東京帝国大学学生課，1934年）

「東京商科予科『学生生活調査報告』」「思想調査資料第26輯」（文部省思想局，1935年）

「学生生活の思想的方面の一調査：学生生活調査第二報告」（慶應義塾理財学会，1935年）

『図書館における読書傾向調査』（日本図書館協会，1934年）

「現代思想調査（第二回）—学生はどう考へるか？」『文藝春秋』，1933年1月号

書籍

1930年代の東京には数多くの出版社・新聞社や書店，図書館が集中し，ここでは濃密な読書空間が構成されていた⁵²⁾。また，当時の読者の状況については，「大正後期・昭和初期の東京の読書社会は，学生と新中間層からなる知識階級を一方の極に，労働者を中心とする大衆読者層を他方の極として，その間に女性読者や少年少女読者等が介在する階層的な読者構造を形成していた⁵³⁾」と永嶺（2001）が述べている。とりわけ，「中等学校以上の教育を受けた都市生活者が活字メディアとの接触する機会に恵まれていた⁵⁴⁾」と大森（2011）は指摘している。

つまり，当時の東京においては，読書する人々による階層が形成され，知識人から労働者までの幅広い人々が書籍と頻繁に接触していた。その中心となっていたのは中等教育以上を受けた人々であり，活字メディアを楽しんでいたようだ。

愛読書籍に関しては，5つの調査の調査方法と分析方法がそれぞれ異なり，ジャンル名も統一されていないという問題点があるものの，比較を試みたものが図表6と7である。図表6の愛読書のジャンル順位を全体的にみると，青年学生たちは，文学・文芸の書籍を最も愛読していることがわかる。また，読書分野も幅広く，専攻関係書・専門書も多く読む傾向にあることが示されている。

さらに詳しく見ると，学年によって学生の読書傾向が異なっていることがわかる。〈東京商大予科調査〉では，全体的に愛読されているジャンルの順序は，小説，文学，経済，随筆，歴史となっている。しかし，図表7の学年別でみると，愛読された書籍のジャンルは学年によって全く異なる傾向を示している。上位の学年生のうち小説を読むと答えたものが30パ

図表 7 東京商大予科生の学年別とジャンル別に見た愛読書 (%) [() 内は実人数]

	小説	文学	経済	随筆	歴史	総計
1 年生	40.5 (111)	24.1 (66)	4.4 (12)	20.4 (56)	10.6 (29)	274
2 年生	29.2 (69)	20.1 (55)	26.3 (72)	18.2 (50)	10.2 (28)	274
3 年生	27.8 (69)	22.9 (57)	27.3 (68)	13.2 (33)	8.8 (22)	249
総計	31.2 (249)	22.3 (178)	19.1 (152)	17.5 (139)	9.1 (79)	797

出典：「東京商科予科『学生生活調査報告』』『思想調査資料第 26 輯』（文部省思想局，1935 年）

ーセント前後であったが、1 年生のみは 40.5 パーセントと高い比率を示しており、1 年次の学生は小説をよく読んでいたことがわかる。2, 3 年生で比率が高くなるのは、経済書で、それは 1 年生のおおよそ 6 倍にもなっている。これは、学年が上がるにつれて専門科目と学ぶ機会が増えることと、より社会人になることを意識するために、学年によって読書傾向が変わり、それがこの結果に表れているのではないかと考えられる。

おわりに

昭和初期の東京において出現したとされている読書空間創出の経緯を都市東京の形成、読書装置の発展、活字メディアの大衆化の 3 つの要素から辿ってみた。この時代の日本で都市化は、交通網などのインフラの整備、人口の拡大、教育普及の促進などによってもたらされたが、この都市化がもたらす国民の娯楽欲求を満たしたものの一つとして、日本では書店、古書店・露店、図書館などの読書装置が整えられ、『キング』『文藝春秋』のような大衆総合雑誌の登場と円本、文庫本の販売戦略の実践により、活字メディアの大衆化が実現したことについても考察した。このような昭和初期の東京における読書空間の出現を実証するものの一例として、当時実施されていた様々なエリート学生を対象とした読書調査の分析を本論では行い、彼らの読書傾向からみた当時の読書空間の実情の検証を試みた。

〈帝国大生調査〉、〈東京商大予科生調査〉、〈慶應義塾生調査〉の新聞購読データから、学生たちによく購読されていた新聞は、『東京朝日新聞』、『東京日々新聞』、『読売新聞』、『報知新聞』と『時事新報』であった。高等教育機関の学生たちの購読新聞は彼らの家庭における購読新聞でもあり、学生たちの所属階級との関係性を示唆するものとなった。

雑誌に関しては、当時の学生たちの雑誌購読はごく一般的なことであって、購読された雑誌の分野も幅広く、種類が 200 種にも達していた。しかし、当時のエリート学生たちは、『改造』、『中央公論』、『文藝春秋』という勉強目的の総合雑誌をよく購読していたが、『キング』のような余暇・娯楽としての大衆雑誌もかなり愛読されていたことが明らかになった。

さらに、愛読書籍に関しては、青年学生たちは、文学・文芸の書籍を最も多く愛読していることが分かった。また、その読書対象の分野も幅広く、専攻関係書・専門書も多く読む傾向にあった。また、〈東京商大予科生調査〉のデータによると、学年別の学生の読書傾向に違いがあり、1年生は上位の学年生より小説をよく読んでいるが、2、3年生は、経済書かなり読んでいる。学年が上がるにつれて専門科目と学ぶ機会が増え、より社会人になることを意識するために学年によって読書傾向が変わる可能性があることもわかった。

読書国民の定着化により出版文化が興隆した昭和初期のエリート青年を対象として実施された調査結果を用いて、当時の高等教育機関在学者の読書傾向を検証した。ここにおいても、都市化の結果として首都東京に出現し、一般大衆による読書行為が実践された昭和初期の読書空間は、都市在住のエリート青年たちにおいても例外ではなく享受されていたことを示唆するものとなった。

注

- 1) 庄司浅水『本の文化史：ブック・アラカルト本の文化史』（雪華社、1969年）、5頁
- 2) 前掲書庄司、58-60頁
- 3) 前掲書庄司、69-70頁
- 4) 前掲書庄司、5頁
- 5) 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』（日本エディタースクール出版部、2001年）、ii頁
- 6) 「青年」という言葉は本論の第3章の中に詳しく説明していくが、本論の「青年」は1930年代の高等教育を受けている大学生たちの「エリート学生」を指す。
- 7) 河合栄治郎『学生と社会』（日本評論社、1940年）、68頁
- 8) 北岡伸一『日本の近代5 政党から軍部へ』（中央公論社、1999年）、124頁
- 9) 前掲書北岡、130頁
- 10) 中川清『日本都市の生活変動』（勁草書房、2000年）、245頁
- 11) 鈴木博之『日本の近代10 都市へ』（中央公論社、1999年）、292頁
- 12) 前掲書北岡、126頁
- 13) 「読書装置」という言葉は、永嶺重敏の著書『モダン都市の読書空間』（日本エディタースクール出版部、2001年）によって提唱された概念で、読書のための公的・私的な社会的装置という意味である。
- 14) 古書店（こしょてん）：古本を営業として売買する業者の総称。古本屋（ふるほんや）ともいい。英語では“secondhand bookshop”と呼ばれている、また古典籍や貴重本を専門とする店は“antiquarian bookshop”という。一般には読み古された本を安価で売る店として人々に親しまれているが、国宝級の写本や古版本を扱う古書店は経験に裏打ちされた書誌の知識を豊富に有し、作家・研究者の陰の資料提供者として機能することも多い。（下中直人編『世界大百科事典25』（平凡社、2007年）228頁）本論文で扱っている古書店は、読み古された本を安価で売る店を指している。
- 15) 前掲書永嶺（2001年）（日本エディタースクール出版部、2001年）、19頁
- 16) 前掲書永嶺（2001年）、21-24頁

- 17) 永嶺重敏『〈読書国民〉の誕生』（日本エディタースクール出版部，2004年），205-206 頁
- 18) 前掲書永嶺（2001年），28-31 頁
- 19) 前掲書永嶺（2001年），33 頁
- 20) 前掲書永嶺（2001年），51 頁
- 21) 前掲書永嶺（2001年），35 頁
- 22) 前掲書永嶺（2004年），viii 頁
- 23) 前掲書永嶺（2001年），128 頁
- 24) 川井良介編『出版メディア入門第2版』（日本評論社，2012年），40 頁
- 25) 岩田竜子『学歴主義の発展構造』（日本評論社，1988年），15 頁
- 26) 前掲書岩田，10 頁
- 27) 文部省編『学制百二十年史』（ぎょうせい，1992年），15 頁
- 28) 前掲書『学制百二十年史』，32 頁
- 29) 木村直恵『〈青年〉の誕生：明治日本における政治的実践の転換』（新曜社，1998年），187-189 頁
- 30) 歴史教育者協議会編集『学校史でまなぶ日本近現代史』（地歴社，2007年），50 頁
- 31) 前掲書北岡，123 頁
- 32) 文部科学省「日本の成長と教育（1962年度）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/（閲覧日 2016 年 7 月 22 日）
- 33) 前掲書『学制百二十年史』，61 頁
- 34) 竹内洋『立志・苦学・出世：受験生の社会史』（講談社，2015年），125 頁
- 35) 前掲書河合（1940年），72 頁
- 36) 前掲書永嶺（2001年），5 頁
- 37) 河合栄治郎『学生と教養』（日本評論社，1937年），15-16 頁
- 38) 室伏高信『青年の書』（モナス，1936年），51 頁
- 39) 前掲書河合（1940年），三木清「ジャーナリズム」285-315 頁
- 40) 栗原彬『やさしさのゆくえ＝現代青年論』（筑摩書房，1981年），18 頁
- 41) 浜島朗編『現代青年論』（有斐閣，1975年），160-162 頁
- 42) 前掲書浜島，2 頁
- 43) 前掲書河合（1940年），68 頁
- 44) 内川芳美「新聞読書の変遷」『新聞研究 No.120』（1961年，19-27 頁），21 頁
- 45) 山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局，1981年），244 頁
- 46) 前掲書山本，245 頁
- 47) 前掲書山本，241 頁
- 48) 前掲書山本，191 頁
- 49) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』（日本エディタースクール出版部，1997年），236 頁
- 50) 前掲書永嶺（1997年），236 頁
- 51) 前掲書永嶺（1997年），236-237 頁
- 52) 前掲書永嶺（2001年），7 頁
- 53) 前掲書永嶺（2001年），6 頁
- 54) 大森龍太『昭和初期における東京の若者の余暇—ある人物の日記を事例として—』（東京経済

大学大学院学位請求論文, 2011 年), 81 頁

参 考 文 献

〈書籍・論文〉

- 岩田竜子『学歴主義の発展構造』(日本評論社, 1988 年)
- 内川芳美「新聞読書の変遷」『新聞研究 No.120』(1961 年, 19-27 頁)
- 大森龍太『昭和初期における東京の若者の余暇—ある人物の日記を事例として—』(東京経済大学大学院学位請求論文, 2011 年)
- 河合栄治郎『学生と教養』(日本評論社, 1937 年)
- 河合栄治郎『学生と社会』(日本評論社, 1940 年)
- 川井良介編『出版メディア入門第2版』(日本評論社, 2012 年)
- 北岡伸一『日本の近代5 政党から軍部へ』(中央公論社, 1999 年)
- 木村直恵『〈青年〉の誕生: 明治日本における政治的实践の転換』(新曜社, 1998 年)
- 栗原彬『やさしさのゆくえ=現代青年論』(筑摩書房, 1981 年)
- 下中直人編『世界大百科事典』(平凡社, 2007 年)
- 小学館国語辞典編集部編集『日本国語大辞典 第2版』(小学館, 2002 年)
- 庄司浅水『本の文化史: ブック・アラカルト本の文化史』(雪華社, 1969 年)
- 鈴木博之『日本の近代10 都市へ』(中央公論社, 1999 年)
- 竹内洋『立志・苦学・出世: 受験生の社会史』(講談社, 2015 年)
- 中川清『日本都市の生活変動』(勁草書房, 2000 年)
- 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール出版部, 1997 年)
- 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部, 2001 年)
- 永嶺重敏『〈読書国民〉の誕生』(日本エディタースクール出版部, 2004 年)
- 浜島朗編『現代青年論』(有斐閣, 1975 年)
- 室伏高信『青年の書』(モナス, 1936 年)
- 文部省編『学制百二十年史』(ぎょうせい, 1992 年)
- 歴史教育者協議会編集『学校史でまなぶ日本近現代史』(地歴社, 2007 年)
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局, 1981 年)

〈新聞・調査・URL〉

- 『東京日日新聞』1926 (大正 15) 年 11 月 24 日, 朝刊
- 「学生生活調査」(東京帝国大学学生課, 1934 年)
- 「東京商科予科『学生生活調査報告』」『思想調査資料第26輯』(文部省思想局, 1935 年)
- 「学生生活の思想的方面の一調査: 学生生活調査第二報告」(慶應義塾理財学会, 1935 年)
- 『図書館における読書傾向調査』(日本図書館協会, 1934 年)
- 「現代思想調査(第二回)—学生はどう考へるか?」『文藝春秋』, 1933 年 1 月号
- 文部科学省「日本の成長と教育(1962 年度)」
- http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad196201/ (閲覧日 2016 年 7 月 22 日)